

自性清浄補遺

良寛と子どもたち

宮坂 広作

1. はじめに

著者が良寛に関心を持つようになったのは、老年に到ってたまたま彼の詩歌に接したことからであった。彼の作品の文芸的価値を云々する資格はないが、その詩(思)想に深い感銘をおぼえたのである。しかし、良寛自身の作品や彼についての著作を熱心に読む動機としては、彼と子どもたちとのあいだの交歓について、その意味を理解したいという願望があった。良寛はなにもひまを持ってあましたり、寂寥をまぎらわすために子どもたちと遊び呆けた訳ではあるまい。彼と子どもたちとの遊戯には、良寛の本質に発するものがあつたであろう⁽¹⁾。

良寛についての通俗的イメージとして「お人好し」や「孤高な老僧」が一般的であることに、かつて小宮山量平は異議を申し立てた⁽²⁾。良寛の天真無欲・現世超脱を善人モデルでアイドル化するのではなく、「今まさに世界に類例もないほどに人間喪失の地獄図を現出させている日本人たちに対し、真の人間的な回帰点を切実に指し示している」真人として敬愛すべきだ、というのである。

良寛と自己のあいだに、こうしたきわめて現代的な緊張感を持って関係を築いたのが、北川省一である⁽³⁾。北川の良寛認識には、十分な考証に欠けるところがあり、しばしば北川の感情移入あるいは自己像としての良寛解釈がみられさえする。もちろん、すべての解釈にはそうした要素がある。小宮山もまた、人それぞれにわが良寛像を描き、それぞれに敬愛を深めること自体が当然だとし、それこそが良寛の偉大さの証しでもあると述べている。しかしながら、良寛についてはあまりにも身勝手な読み込みがされすぎていた。着実な実証的研究もあるが、恣意的な解釈や逞すぎる想像力が、良寛をひどくデフォルメした罪は軽くないであろう。

上記のような反省をこめて、このノートでは二つのことをしたい。ひとつは、実際に良寛が子どもたちとの交遊についてどのような詩歌を遺しているかを確認し、それ

らについて後人がおこなったコメントを参照することである。もうひとつは、良寛に関する児童書で良寛がどのように描き出されているかをみることである。この種の書物はかなり多く刊行されており、そのすべてを窺見しようと志しているが、重要な作品で未見のものもまだ残っている⁽⁴⁾。ここでは3冊だけとりあげることにしよう。

最後に、良寛と子どもたちの交遊について、その意味をどう考えるべきかを述べることにしたい。「研究ノート」という、研究過程での備忘録・中間報告にすぎない本稿では、熟慮された結論を提示することはできない。先達の言説の糟粕を嘗めつつ感じたものの一端を書きとどめるだけである。

2. 児童書における良寛像

良寛についての児童書は、戦前から刊行されている。戦後になってもさかんに出版されたが、近年はあまり出ていないように思われる。日本の社会と文化の変容、とくに子どもたちの生活と意識の急激な変化によって、良寛は子どもたちから遠い存在になってしまった。子どもたちの活字離れという状況が広がっているのだが、子どもたちにとって良寛はあまり魅力的には見えないようである。これまで、児童図書は良寛をどのように描きだしてきたのだろうか。良寛のすばらしさをどのように子どもたちに伝えようとしたのであろうか。二、三の作品をとりあげてみたい。

(1) 那須田稔『良寛』(国土社、1967年)

「子ども伝記全集」9として刊行された。著者は1932年静岡県生まれ。東洋大学文学部国文科・愛知大学中国文学科で学び、著述生活に入った。児童文学作品があり、日本児童文学者協会理事をつとめた。この本の構成はちょっと変わっていて、第一章の「ふしぎなぼうさま」で、七、八歳の栄蔵がひとりで海岸の岩の上に座っていたとき、通りがかりの僧侶から空に字を書く練習法を教わったという話が書かれている。後年栄蔵はこの僧に再会し、国仙という名であることを知ったという筋立てである。

栄蔵の出家の理由については、栄蔵の悩みをよく知っていた母親が、国仙に頼み込み、栄蔵に出家を勧めた、ということになっている。父以南が旅に出ている留守中に、母親が首導して栄蔵を励まして首途を見送ったとされる。もちろん、栄蔵は国仙の法話を聴き、身分の違いはあっても仏様の前では人間として平等であること、人間

は赤ん坊のときのような清らかな心を忘れるので争いごとが絶えないことなどを教えられて、国仙の弟子になりたいという気持ちを起こしたことが記されている。良寛の帰郷については、「ある日、ひょっこりと、なつかしい出雲崎へかえってきました」と、あっさり書かれている。

良寛と子どもたちの遊戯については、まりつきや「一貫目、二貫目…」の遊びの場面が描かれ、子どもと遊ぶときの良寛はほんとうに幸せそうであったこと、子どもたちの明るい笑い声は人びとの気持ちをしらすらすらあたたかく、和やかにしたことが書かれている。

那須田はあとがきで、欲を棄て、子どもの裸心に帰った者を一面的に見ると、愚かな人間に見えるだろうが、良寛はまさに偉大な愚か者であり、その崇高な精神は彼に接した人びとを感動させた、と説明している。自然・動物、貧しい者、弱い者、子どもを愛した、やさしい人間愛が、時代を超えて輝きつづけるだろう、と述べている。

児童文学者としての那須田は、おもしろく読ませるための工夫を、筋立ての上でも、文章の上でもいろいろとおこなっている。事実あまりこだわらず、フィクションを積極的に採用している。それによって、たしかに平板さは多少克服できていると思われるが、良寛の大愚が子どもたちに理解されることは困難である。せいぜいヒューマニスト良寛といったところであろう。

(2) 関英雄『りょうかん』(小峰書店、1972年)

これは、「幼年伝記ものがたり」というシリーズの中の一冊である。「子どもがすきで、子どもと遊んでばかりいた りょうかんさんののはなしを 知っている人もいますね」(「はじめに」)といった平易な文体を採用しているが、小学校の低学年でも理解できる内容かどうか。

最初の章、「りょうかんさんがやってきた」で、春を待ちかねて托鉢に出た良寛が百姓たちとのどかな会話をしたり、子どもたちと遊戯をしたりする様子が描かれている。第二章の「わすれた はちの子」のあと、第三章から良寛の伝記がはじまる。子どもたちに興味を持って読んでもらおうとする、内容構成上の工夫である。

出家の理由については、名主の仕事は骨の折れる上に、町の人からも憎まれやすい仕事で、栄蔵はこの仕事が嫌で嫌でたまらなかつたこと、橘屋と京屋の高札をめぐる争いをばかげたことだと思ったこと、国仙和尚を訪ねてこの活き仏に師事しようと決

心したこと、が書かれている。橘屋と京屋の紛争をとりあげているのは珍しく、また、光照寺駆け込みの件に触れていないのは、史実と合致している。

国仙との師弟関係についてはほとんど叙述がなく、母・父の死と国仙の示寂が書かれ、良寛はしきりに故郷のことを思い出すようになった、としている。父母なき後、弟は名主役を立派にやっているか、出雲崎の町はどうなっているかと、生まれ故郷のことが気になり、佐渡島の姿、日本海の波の音が懐かしく思い出されるようになった、としている。

子どもとの遊戯の場面の描写は、他の本と別に変わったところは無く、隠れ鬼の遊びでは、「一貫・二貫」ののけぞりが紹介され、遊び呆けて夕飯が何もないことに気づいても、幸せな気持ちでいた、と書かれている。すみれを摘むことに熱中して鉢の子を置き忘れた話では、いっしょに遊んでいた女の子たちや、通りかかった百姓がともに捜してくれたということになっている。

著者は、これが幼年向きの伝記物語であるため、良寛の仏教家としての思想や、詩人・文学者としての作品の味わいの深さなどを詳しく語るという訳にはいかなかったと「あとがき」で書いている。良寛についての口碑・逸話の中から事実として比較的信憑性のつよいものを中心として、情景を想像して書いた、というのである。想像を織り込んで書いている分、伝記ではなく童話「伝記童話」というべきものだが、事実を曲げることはしないという方針で書いた、と説明している。

前述の光照寺入門否定(22歳出家)説は、東郷豊治の研究成果に依存している、という。著者は、幼年の読者に理解できる範囲で良寛の詩歌を織り込み、五合庵に訪ねて来た茶店の主人との対話という形で良寛の仏教者としての思想を表現しようとしたと述べている。この要素なしには、良寛はただの奇人にすぎなくなってしまうという考えからする野心的な手法ではあるが、成功しているかどうか。東郷の現代語訳にもとづいて、それをさらに子ども向きにしてみたという一例をあげてみよう。

五 合 庵

索々五合庵 室如懸磬然
戸外杉千株 壁上偈数篇
釜中時 有塵 甑裡更無烟
唯有東村叟 時敲月下門

(東郷豊治訳)

わびしいなあ、五合庵は。部屋の中には一物の見るべきものもない。戸外は多くの杉木立ちに囲まれ、壁上には偈を数篇貼りつけてあるだけ。釜は用いないから時にちりがたまり、せいろはいっこうに炊煙をあげない。けれども東村に住む老人だけは、しばしば月下にこんなわびしい庵に遊びにきてくれる。

(関英雄訳)

さびしいな 五合あん。すんでるへやはからっぽだ。そとにはすぎの木が千ぼんかべには 字をかいた かみきれがすこし おかまに 米のない日もある その日はごはんをたくけむりも のぼらない たまに 友だちがたずねてきて 月夜に門をたたくこともある

詩意はほぼ正しく伝えられていると思うが、詩情の方はどうであろうか。関は、「たべるものもないときがある くるしいくらしが、あらわれています」とコメントしている。たしかに、これは「資生艱難」の生活風景を描いているが、無一物で索然たる空庵の孤独な安居に自足している心境も窺える。この詩境を子どもに理解させることは、まさに至難であろう。

(3) **金田茂郎「良寛」**(少年少女新伝記人物全集12『子どもの幸福をねがう人たち』学秀図書、1976年)

著者は良寛のことを、「子どもを愛しとおしたありのままの人間」と評している。冒頭から、「山寺の おしょうさんは…」と、子どもたちと調子よく歌い踊る良寛の姿が描かれている。遊び疲れて、良寛のまわりで寝ころんでいた子どもたちに、良寛は例の月兔の物語をし、子どもたちは涙を浮かべ、深い感動にとられる様子が詳細に書かれている。これは相馬御風の二番煎じであり、童心の良寛というイメージの継承である。

栄蔵の出家の理由は、代官と漁師たちとのいざこざの解決に失敗し、ありのままに、正直にとりかはるべからず結果を招くかに悩み、醜いことや悪いことが当然のおこなわれているこの世の中がつくづく厭になったからだと説明している。父母を説得し、父母の許しを得て光照寺に入った、ということになっている。帰郷の理由についてはとくに記述がなく、父以南の死が原因であろうと読者に推察させ

るような書き方になっている。

子どもたちとの遊戯のことについても、この書物では格別の説明はなされていない。良寛の姿を見かけると、子どもたちはあちこちから駆け寄って来、良寛は村人たちや子どもたちのあたたかい思いやりによって、不便な草庵の暮らしを20年間も送ることができたのだ、とする。良寛と子どもたちが仲良しになれ、楽しいことや愉快なできごとを共に体験できたのは、良寛の正直で、ものごとにこだわらない、自由な性質、自然と人を愛してやまない生活と人柄の故であった、というのである。

3 . 児童との遊戯にふれた良寛の詩歌

子どもとの遊戯を好んだ良寛が、それをテーマにしたり、そのことにふれた詩歌を遺しているのは、当然のことである。それらの詩歌を通して、良寛が子どもとの遊びにどんな思いを託していたかを見ることにしたい。

(1) 良寛歌集から

まず、良寛の歌からみていくことにするが、東郷豊治の『良寛歌集』が、歌意による細かい分類をおこなっており、「一 手まりつき」、「二 子どもと遊ぶ」の二章があるので、それに依拠して提示することにしよう。ただし、類歌は一，二の区別を無視して並記する。

あづさゆみ 春さり来れば 飯乞ふと 里にい行けば 里こども 道のちまたに
手まりつく われも交じりぬ そがなかに ひふみよいむな 汝がつけば 吾はうたひ
吾がうたへば 汝はつきて つきてうたひて 霞たつ ながき春日を 暮らしつるかも
霞立つ永き春日を子供らと手毬つきつゝこの日暮らしつ.....

冬ごもり 春さり来れば 飯乞ふと 草のいほりを たちいでて 里にい行けば
里こども いまを春べと たまぼこの 道のちまたに 手まりつく われも交りて
そのなかに ひふみよいむな 汝がつけば わはうたひ あがうたへば 汝はつく
つきてうたひて 霞たつ ながき春日を 暮らしつるかも
霞たつながき春日をこどもらと手まりつきつゝ この日暮らしつ.....

かすみたつ ながきはるひに いひこふと さとにいゆけば さとこども いまは
はるべと うちむれて みてらのかどに てまりつく いひはこはずて そがなかに
うちもまじりぬ そのなかに ひふみよいむな なはうたひ あはつき あはうたひ
なはつき つきてうたひて かすみたつ ながきはる日を くらしつるかも.....

上記三つの類歌の と は良寛遺墨、 が『はちすの露』からだとされているが、このほかに の第七句から違って、「たまほこの 道のちまたに 子どもらが 今を春べと 手毬つく ひふみよいむな 汝がつけば 吾はうたひ 吾がつけば 汝はうたひ...」とする村山半牧の『僧良寛歌集』のかたちがあり、吉野秀雄は、「長歌は辞句さえ多ければいいというものではない」という理由で、半牧本の形に軍配を挙げている⁽⁵⁾。また、貞心本の、「われも交りて その中に」のところが「にぶい」とし、「汝がつけば」以下の4句も半牧本の方がまさっているとす。吉野は歌人だけに、「ひふみよいむな」以下の諧調音が、手毬つきのリズムカルな動作と音声を写している点をたのしむべきものであろうと評している⁽⁶⁾。

上田三四二もまた、この歌の中心は「ひふみよいむな」という、一息の数詞の中だと言い、この部分が渦を巻き、歌はその渦に向かってきりきりと巻き込まれているとし、この大胆な数詞の一例は、氣息であり、運動のリズムであると述べている⁽⁷⁾。

中野孝次は について、これ及び類歌は良寛のよほど気に入ったテーマであったとし、「自分の心を知ろうというのならこれを読んでくれ、といった趣がある」と述べている⁽⁸⁾。また、「この里に.....」・「霞立つ...」の反歌については、「まことにのびやかで、優游としていて、天地とともに自足しているかのようなたのしい歌」と評した。良寛のつかう「遊戯」ということばは、まさにこういう世界だと思われるとし、「地上即極楽、即心是仏の世界」であり、こういう世界をうたったのは良寛ただひとりだと激賞するのである⁽⁹⁾。

この宮の森の木下にこどもらと手まりつきつこの日くらしつ.....
この宮の森の木下にこどもらと遊ぶ春日は暮れずともよし.....
この宮の森の木下にこどもらと遊ぶ春日になりけらしも.....
この里に手まりつきつゝこどもらと遊ぶ春日はくれずともよし.....
こどもらと手まりつきつゝこの里に遊ぶ春日はくれずともよし.....
八幡の森の木下にこどもらと遊ぶ夕日のくれま惜しかな.....
霞たつながき春日にこどもらと遊ぶ春日は楽しくあるかな.....

霞立つながき春日の子供らと手毬つきつゝこの日暮らしつ……

上記八つの類歌につき、吉野秀雄の評では、 について、「捨てがたい順熟」⁹⁾、
については、「霞立つながき春日」で駘蕩たる空気をだしており、 が希望を述べて
いるのに対し、 は経験の事実を横直に告げていて、滋味深い、としている¹⁰⁾。に
ついては、「けらしも」が推量というより、「なりにけるかも」に近いもので、また、
の結句「この日くらしつ」は、類歌の「暮らしぬるかな」が薄弱で拙いのに対し、
まさっていると判定している¹¹⁾。

つきてみよひふみよいむなこゝのとをとをと納めてまた始まるを……

手まり唄ひふみよいむなこゝのとをとをと納めてまた始まるを……

いざさらばわれもやみなむこゝのまり十づつ十を百と知りなば……

は、貞心尼の「これぞこの仏の道にあそびつつくやつきせぬみ法なるらむ」に
対する返し歌として知られるものである。上田三四二が「絶妙の三十一文字」と称
え、吉野秀雄が「しなやかな諧調のうちに、貞心尼にたいする愛念がにっている」
と評した、この歌の含意については、諸家が言及するところである。たとえば久馬慧
忠は、良寛はこれらの歌で、「仏の道の心と手毬の心とを重ねて真実を述べようとさ
れたのでしょ」と述べ、むつかしい理由を抜きにして、何の意味もない一から十ま
での数の繰り返し、ただそれだけが真実だと示したのだろうか」とコメントしてい
る¹²⁾。 も、貞心の「君なくば千たびもゝたび数ふとも十づつ十をもゝと知らじを」
に対する返歌である。

さにつらふ妹が給ひし新毬をつきてかぞへてこの日くらしつ……

さすたけの君が贈りし新毬をつきてかぞへてこの日くらしつ……

いざ子ども山べに行かむ桜見に明日ともいはば散りもこそせめ……

いざ子ども山べに行かむ重見に明日さへ散らばいかにかせむ……

こどもらよいざ出でいなむ伊夜日子の岡の重の花匂ひみに……

こどもらと手たづさはりて春の野に若菜を摘むは楽しくあるかも……

こどもらと手たづさはりて春の野に若菜摘みつゝ楽しくあるかな……

秋の雨のはれまに出でてこどもらと山路たどれば裳のすそ濡れぬ……

子どもたちと野山に行楽する良寛の浮き立つ遊戯の気持ちが伝わってくる一連の歌である。吉野秀雄の教えるところでは、「いざ子ども」は万葉集以来「さあ皆の衆」の義だが、良寛はここでは文字どおり「こどもら」の意味で使っているだろうと¹³。

の歌は、木村元右衛門が同地の隆泉寺に一切経七千余巻を寄進し、経堂を建立したとき、経堂額面に書かれたもので、文政十一（1828）年良寛71歳のときの作品だという。そういうフォーマルな場に書くものにふさわしいしかつめらしさも寓意もない歌を、淡々として平気で書く態度こそが、吉野は「この和尚を敬重してやまぬ根本の理由」だとする。吉野の性格やものの考え方は、多分に良寛と共通していたのである。なお、桜や梅よりも堇の方に心を寄せているのも、歌としての特色だと吉野は言う。優しさ、内気など、良寛のイメージとだぶるものがあるように筆者にも感じられる。

秋山のもみぢは散りぬ家苞に子らが乞ひせばなにをしまし……
あづさゆみ春も春とおもほえず過ぎにし子らがことを思へば……
春されば木々の梢に 花は咲けども もみぢ葉の 過ぎにし子らは 帰らざりけり……
人の子の遊ぶをみればにはたづみ流るゝ涙とゞめかねつも……
子を思ひ思ふ心のまかりなばその子に何の罪を負ふせむ……
子を思ひすべなき時はおのが身をつみてこらせど猶やまずけり……
去年の春折りて見せつる梅の花いまは手向けとなりけるかも……
子を持たぬ身こそなかなかうれしけれ空蟬の世の人に比べて……
かい撫でて負ひてひたして乳ふゝめて今日は枯野に送るなりけり……
み子のために嘗む法はしかすがにうき世の民に及ぶなりけり……
もみぢ葉のすぎにし子等がこと思へば欲りするものは世の中になし……
とをかまりいつかはたてどひらさかをこゆらむころがおとづれもなし……
白雪は千重にふりしけわが門に過ぎにし子らが来るといはなくに……
亡きをりは何をたよりに思はまし有るにならひし今日の心は……
春されば木ごとに花はさきぬれど過ぎにし子らは帰りこなくに……
月は経ち日は積もれどもよひよひの夢に見えつゝ忘らえなくに……
今日もかも子らがありせば携へて野への若菜を摘まゝしものを……
花見れどさらに心の慰さまぬいとゞ思ひの種とこそなれ……
世の中は玉も黄金もなにかせむひとりある子に別れぬる身は……
子どもらを生まぬ前とは思へども思ふこゝろはしばしなりけり……
花見てもいとゞ心は慰まず過ぎにし子らがことを思ひて……^{②1}

朝戸でて子らがためにと折る花は露も涙もおきぞまされる……⁽²²⁾

子どもたちの夭折を傷む良寛の歌は、かくも多数である。親しい知人の子どもが、疱瘡などで死んだ際の悔やみの歌も多いが、通り一べんの弔歌ではなく、真実悲傷のころがつたわってくる。は、「こそは疱瘡にて子供さにはに失せにたりけり。世の中の親の心にかはりて読める」と題し、医者の方原田正貞への書簡の中に、・と共に載せられている。・も同様の詞書きでつくられている。の第3句以降は万葉集中の歌の表現をそっくり模しているが、初二句によって一首全体が良寛自身のものになっていると、吉野秀雄は評する⁽¹⁴⁾。「同情切実、親になりきったところがある。わたしは昔からこの歌を愛唱した」と述べている。

は阿部定珍あての書簡の中に、「雪の降るを見て主人に代わりてよめる」の詞書きを付けて出ているもので、吉野は、「哀傷のあまりのデスペレートな気持ちを抒べた特色ある歌」と述べ、感情移入は本物だと評する⁽¹⁵⁾。は、山田杜臯が末子を失ったときの悔やみの手紙の中で、「ひたし親に代わりて」と題する歌であるが、「これも自由のうまさに富み、理屈を感じるより前に、その温い愛情に包まれてしまう」というのが吉野評である。

以上、子どもとのかかわりで詠まれた良寛の和歌は、子どもに対する彼の暖かい気持ちが素直に表現されており、その平淡な詞づかいの中に、彼の真情が流露している。この自然な愛情が子どもたちに感受され、同様な愛情が子どもたちから良寛に向けられたのであろう。

(2) 漢 詩

良寛には子どもとの手まりの遊びや草遊びをうたった詩が数篇ある。テーマとしては、「乞食」・「騰々」を表題に掲げたものと、「鬪草」・「毬子」といった遊びそのものを掲げたものがある。

乞 食

十字街頭乞食了 八幡宮辺方徘徊
児童相見共相語 去年痴僧今又来……

騰 々

裙子短兮褊衫長 騰々兀々只麼過
陌上兒童忽見我 拍手齊唱放毬歌……

鬪草

也与兒童鬪百草 鬪去鬪來轉風流
日暮寥寥人歸後 一輪明月凌素秋……

頭髮蓬々耳卓朔 衲衣半破若雲烟
半醉半醒歸來道 兒童相擁後与前……

日々日々又日々 閒伴兒童送此身
袖裏毬子兩三箇 無能飽醉太平春……

について、上田三四二が、子どもたちの眼は乞食坊主に注がれ、そのうちに彼らの魂の同類を看破し、良寛もまたじっこんの魂に相会うことで真に幸福の絶頂ともいうべき時を過ごした、と書いている⁽¹⁶⁾。また、 について、遅々たる春日を謳歌する人の満足を表現しつつも、他方、こうした風狂のうちに日を消してゆく自分に対する、「自嘲ともいわぬまでも、何かそれに近い自省の心といったもの」が動いていないだろうかと述べている。「無能」という語のひびきが残って、「裏返しにされた慷慨の語気」が、読もうと思えば読めるというのである。結句について、「心の片隅にチクリと自嘲のおもい」が通り過ぎたことを読み取ったのは、森山隆平も同様であった⁽¹⁷⁾。「非生産的な自分を反省自戒する気持」、すなわち、世の中の人はいくせく働いているのに、自分だけは人様の信施に依って生きていることへのうしろめたさが良寛にはあった、というのである。

中野孝次は、上田三四二が をとくに好み、最後の一行について「この遊戯僧の心ゆくまでの充足感が歌われている」と評したのに対し、自分は起句の方に注目して、それが「つきてみよ」の歌と同じ気味合いを持っていると述べている⁽¹⁸⁾。金儲けにはげんだり、せつせと働くばかりが生きるのではなく、一心不乱に毬をつくことの中にも生の充実はあるのだと言っているように感じる、というのである。筆者には、上田と同様に「無能飽醉」のあたりに良寛の自己冷評の気分が感じられるのだが、中野は自己肯定として解している。

毬子

袖裏繡毬直千金 謂言好手無等匹
箇中意旨若相問 一二三四五六七……

一箇繡毬打又打 自誇好手無倫匹
此中意旨若相問 一二三四五六七……

青陽二月初 物色稍新鮮 此時持鉢盂 得々遊市廓
兒童忽見我 欣然相将来 要我寺門前 携我步遅々
放盂白石上 掛囊綠樹枝 于此鬪百草 于此打毬兒
我打渠且歌 我歌渠打之 打去又打来 不知時節移
行人顧我笑 因何其如期 低頭不応伊 道得也何似
要知箇中意 元来只這是……

について、森山隆平はきわめて単純な解釈を施し、「まりつきなら俺が一番だ、得意満面の良寛が目に浮かぶようである」¹⁹⁾というのだが、上田三四二ともなるとそうはいかない。「数詞はここでは、一種の偈の形をとり、思想を排除することによってかえって思想の核心をつくような気合いを語っている」と説明している²⁰⁾。星野清蔵はすでに戦前、「彼の宗乗を述べ尽して余蘊なしといふべきである。世間の人々、往々何も知らずして、これを見て徒らに毬について兒童と遊ぶことの無邪気さのみと思ふものがある。三省しその遊ぶことそのものに徹すべきである。易はこれを説き、老子はこれを述べ、仏教は固よりこれを説くのみ。毬子は即ち是れ大道、大道といふもまた是れ毬子を出ない」と注釈している²¹⁾。

上田は、の長詩の結句について、「一二三四五六七」よりもさらに禅機に満ちていると評する²²⁾。これは「言詮及ばずの境地」であり、問う者にとっては突き放されたも同然なるが故に、その一步の奥をあえて言語化する親切さによって、良寛は「一二三四五六七」と答えたのだ、というのである。上田はさらに、道元の「典座教訓」を引き、道元の「如何ならんか是れ文字」という問いかけに対して、典座のいわゆる「循界不曾蔵」とは良寛の「元来只這是」なのだ、と述べている。この数詞こそは、良寛が祖師から与えられた公案のようなものだというこの意味については、ここで

はあまり立ち入らないでおこう。

石階蒼々蘚華重 杉松風薫雨霽初
喚取兒童賒村酒 醉後私却數行書……

秋 中 作

歳晚飯一庵 庵在荒村陸 蕭々寒雨裡 落葉埋空階
無心理唄葉 有時吟我詩 偶有牧童來 伴我赴村齋……

三春寥々臥草庵 有客望我一紙画
翻思去年在八幡 游戲不覺到日夕……

独臥草庵裡 終日無人視 鉢囊永掛壁 烏藤全委塵
夢去鞠山野 魂歸遊城闕 陌上諸童子 依旧侍我臻……

・ の村童は点描くらいの印象であるが、 ・ は病中の所懐だけに、子どもたちのことを切なく思いやっている。 は良寛終焉の間近につくったという、「もゝづたふ いかにしてましくさまくら たびのいほりにあひしこらはも」とパラレルである。

良寛の漢詩の中にもうひとつ、「時来寺門傍 偶与兒童期」という句を含む、「元非山林士」で始まるものがある²³⁾。全文を掲げるほどのこともないと思うが、良寛と子どもたちの交遊について、良寛自身がどう思っていたかを考えるうえで重要な意味を持っているかもしれない。この詩について石田吉貞は、自分の生涯は乞食をしたり、子どもらと遊んだりしていたばかりだという、単なる自省以上のかなしい自嘲であり、「自己の生涯に投げる冷ややかな虚無の眼」ではないかと評している²⁴⁾。「生涯何所能 聊言過斯時」という絶句の感慨と同じものを述べた詩は他にもあり、良寛の「魂の底に灰色の万有否定の影があるということは、たといそれがかすかなものであってもかなしいことである」というのである。

良寛には、自方の生き方はあえて自ら選んだものであるという自恃の念をもちた詩や、自己を含めて万有を肯定した詩も多い。禅者の人生観・世界観としてそれは理解しやすい。しかし、もし良寛が村人の貧苦の生活を目のあたりにしながら、平然と

乞食行をし、村人と酒をくみかわしたり、旦那衆と詩歌の応酬をして生活の資を得たり、そして子どもたちと遊び暮らしている自己を単純に是認していたのだとするなら、良寛とは愚人にすぎない。そうした生き方しかできぬ自分について、彼がしばしば恥じ、嘆くところに、われわれは共感し、慰められる。

4. 良寛と子どもたちとの交遊について

良寛について書かれた書物はすでに数多いが、その多くに良寛と子どもたちの遊びのことが書かれている。良寛をして広く世に知らしめるうえで大きな功績のあった相馬御風も、まさにそうした書物を遺している。西郡久吾の『北越偉人沙門良寛』と並んで、包括的な良寛紹介書として知られる『大愚良寛』（春陽堂、1918年）では、あまり良寛と子どもたちとの交流についてはふれられていないが、昭和初年（1928年）に書いた『良寛坊物語』（春秋社刊）は、良寛と子どもたちの遊びの場面から始まっている。良寛の生涯を物語風に描くことを意図したこの作品は、冒頭に「冬ごもり春さり来れば……」の長歌を掲げている。

うらうらとした春日和の中、良寛と子どもたちが手まりやはじきや隠れん坊をして遊んでいる様子を描く御風の筆は、あたたかさややさしさに満ちている。これは、われわれが良寛について児童書の中で親しんだ世界の原型である。しかし、御風はそういう情景を叙述するだけで、それに何らかのコメントを付けようとはしない。良寛はなぜ子どもたちとこんなに夢中になって遊んだのか。そういう問いは出されておらず、従って答もない。子ども好きだったから。やさしい人柄だったから。そんなことは問う迄もない。自明な事柄だというのが、御風の意見である。そこをもう少し掘り下げてみたいと思い、このテーマについての諸家の意見を渉猟したことがある。論者によって実にさまざまな意見が開陳されている。それらを体系的に整序することは、いまはおこなわない。

論者の中には、このテーマにあまり興味を示さない者もいる²⁵。また、論及してもきわめて淡白な態度をとっている人がいる。たとえば井本農一は、「児童と一緒に毬をつくことと、興に乗じて詩篇をつくることとは、良寛にとって同じような楽しみであったのだ。気晴らしであったのだ。慰めであったのだ。」と書いている²⁶。井本は、良寛と貞心尼の短歌の贈答について、これらのやりとりの詠はまったくその場の逸

興、座興であり、遊戯であったと評する。良寛は世事に無関心ではなく、常に慷慨の気を抱いていたが、自己の無能・無力を識って身を引き、暗夜に涙する以外にはなかったというのが、井本の良寛観である。そして井本は、「童子と手毬をついて楽しまざるを得なかったということである。得なかったということにおいて、それほどの深い精神的苦悩が背景としてあったということ」に心を打たれる、と述べている。

国文学者の井本に比べて、哲学者の唐木順三の読みはさすがに深い。「鉢の子をわが忘るれど」を反歌とする鉢の子の歌について、唐木は、「ここには『遊戯』がある。言葉の上にもそれがある。自出自演の節がありながら、その自演の上にもみづから遊戯している」と述べている²⁷⁾。良寛の遊戯は一遍のばあいと共通しながらも、「弥陀の御法」を持ち出すことなく、御法のない御法がおのずから働いている、とみるのである。つまり、良寛の遊戯とは天真無礙、騰々任運の風光だというわけである。

唐木は、良寛の無邪気について、次のようなことを書いている。六歳の子どもの無邪気は、その年齢から自然に発する稚気であり、分別以前の無邪気である。そんな子どもも、10年たち20年たてばやがて分別くさい大人になっていくであろう。良寛の無邪気は、いかに、その資生・天性によることが多いとしても、60歳の無邪気である。それは、子どもの自然年齢の稚気とは違う莫妄想なのである。大人なのに子どもといっしょになって遊びに耽るのをおかしいと見るのは、大人の分別である。分別のあるべき大人が、無分別の子どもと同じことをするのを非とする、二元対立的な思想に捕らわれた大人の常識・日常道徳を超出したところに良寛はいた、というのである²⁸⁾。

唐木のような哲学者に比べると、仏教思想家・仏教学者たちの解釈はさらに深遠である。竹村牧男や長谷川洋三のばあい²⁹⁾をみれば明らかであるが、ここでは久馬慧忠をとりあげてみよう。彼は曹洞宗の僧侶であり、とりあげるのは2000年1月に刊行された彼の新聞書である。久馬は、良寛が手毬とおはじきに特別な思い入れがあったとし、生涯童心を失わず、小欲知足に徹して清貧に甘んじ、悠々自適の生活の中で幼い子どもたちと接した良寛を、空前絶後の、稀有な奇僧と賛嘆する³⁰⁾。毬の形が丸く、円相であるのは、比較も差別も、悟りも迷いもない一円相の世界、仏法そのものの世界であり、「仏のモノサシ」の世界だと述べている。

良寛と子どもたちの手毬遊びについて、久馬は、それが良寛にとってその時その場における精いっぱい生き方であり、「無所得の遊行」であったとする。「毬子」と題

する詩について、「一二三四五…」の数字の深い意味を良寛は知っていたであろうが、毬つくときにはそんな分別は働く余裕がなく、ただ毬つくことだけに集中する。思慮分別の世界から超出した、「只管打座」と共通する境地にいたのだと久馬は言う。良寛と遊ぶ子どもたちは、理屈抜きに遊び楽しみ、良寛もその楽しみを共享する。「時間空間を超越して永遠に光り輝く尊い生命そのもの」としての行為だったというのが、久馬の所説である。

ところで久馬は、春日遅々たる越後平野での、手毬遊びの牧歌的平和のシーンの背後に、農民困苦の生活現実があったことを指摘する。その現実を認識し、共苦していた良寛が、それを解決するために何もできないでいる自分の無力を自省していたことも述べている。しかし久馬は、良寛がそういったことを「忘れ切って」、子どもたちと遊んだこと、現実悲惨はそっとしておいて単なる手毬歌として書きつづった「ご心境を静かに思い巡らす時、ますます良寛さまのお心の深さを感じずにはおられません」と述懐するのである。

人の分別・思惑を超えた「無事」の世界へと現実を脱出する悟入と、単に現実からの逃避とがどう違うのか、凡愚の筆者には理解しがたい。悟りだろうが、逃避だろうが、貧困・悲惨な農民生活そのものは少しも改善されないのである。現実も理屈もかわりなく、ただひたすらに遊興に打ち込めば、そこに仏法の真理があるなどと言われても、論者に同調してありがたがってはられない。凡夫であり、その立場から良寛を理解しようとすることを宣言した北川省一は、この問題をどう考えていたのだろうか。

北川は良寛について、斜頸の「かたわ者」、動作のにぶいまぬけ・まのびとして、差別・苦痛を受け、それ故に「人をへだつる心」の恐しさを知る人間になったと書いている³¹⁾。その良寛が、すべての人間の価値は平等であり、ひとしく仏性を保持していると教える法華経を読誦することで、「物外の人」になりえたと指摘する。かくて良寛は、常不軽菩薩になって、人間礼拜と仏性讃嘆を行ずることができるようになったというのである。

良寛と子どもたちの交遊について、北川は子どもたち（狂児）が最初この奇僧を襲撃したのではないかと想像する。北川は良寛禅司奇話からいくつかのエピソードを引き、子どもたちが良寛を欺き、いたずらしたことを指摘する。やがて彼らは和解し、良き遊び仲間になったとする。子どもと共に遊び呆けたのは、良寛が徹底した遊戯者

だったからだとしている。良寛における遊戯の本質を説明するのに、北川は莊子やニーチェを引用する。仏教関係者ならば、仏法や悟りで説明するところを、彼は自分の西洋的教養から知識を引き出すのである。北川の見出した遊戯の特質は、世間的な制約・思惑からの解放である。それを北川は、「天心無垢」と表現している。

筆者は北川の説明に蒙を啓かれるところ大であるが、良寛と子どもとの交遊の意味について十分に理解しえたとは思っていない。それが、大人の社会に参入しえなかった非社会的人間の逃避あるいは退行でなく、意味のある行為・社会的実践であったという説明になりえていないからである。もっとも、ほんらい遊戯というのは何か目的を設定して、その実現のために営為するものではないとは、北川の言うところである。興さめればいつでもさっさとやめてこだわらない、それが遊戯というもののだと。しかし、良寛は碁つきの技能を自慢し、賭碁の腕をあげることにこだわり、勝負に執着した。良寛の遊戯というのは、北川や他の論者の言うような、物外の人ふうの、悠々自適というイメージではないのである³²。

良寛と子どもたちの交遊について、筆者は、「不如従児童 遅日打碁子」のニュアンスを「已矣復何道 万事皆因縁」の絶望と重ねて理解するしかない。社会的環境と自己の能力とからして、宗教者としての実践 かの道元のような に進み出ることを断念した良寛の苦悶、それを辛うじて忘れさせる子どもたちとの遊びということではなかったろうか。徳川の幕藩封建制の 弛緩してきたとはいえ 抑圧的権力の支配と、それを支える宗教者たちの腐敗に立ち向かうにはあまりに無力な己を知るとき、退いて韜晦する以外に何ができたとういうのだろうか。その苦さをしばし忘れるために良寛が子どもらと遊び呆けたとしても、誰がそれを責めうるであろうか。

良寛が遊びの中で、遊びをつうじて子どもたちを教化したという論者がある。これは、「保育者」良寛のイメージである。子どもに欺かれても、子どもを欺かなかったところに道德教育者良寛を見る教育家もいる。抹香くさく、教師くさく良寛を描き出す言説に魅力はないが、良寛を実践からの脱落者と見、それ故の絶望と悲哀の表白に卓越した作品³³を遺したこの人物に共感を抱く筆者の心情が、これまた我田引水による歪んだ良寛像を提示するにすぎないことを恐れるものである。

《注》

- (1) 良寛と子どもたちの遊びについての一般的理解は、「子ども好きの良寛さんは子どもと

- よく遊んだ。中でもまりつきはすきであった」(畑克明「まりあそびと良寛さん」『山梨良寛だより』第44号、1998年10月)、「世間の目から見れば、いかにも能なしの乞食坊主に見えるが、せつせと働けばかりが生きることはない。一心不乱に子どもたちと毬をついて遊ぶ、『その中にも生の充実がある』』といったものであろう(渡辺澄子「遊戯の人」(同上、第40号、1997年8月)。
- (2) 川上四郎画集『絵本良寛さ』「解説」理論社、1975年。
 - (3) 原広司「死者とともに生きよ」『良寛』23、全国良寛会、1993年。
 - (4) 未見のもので筆者がとくに執着しているのは、新美南吉『良寛物語 手毬と鉢の子』1941年。戦後刊行されたという良寛漫画。
 - (5) 吉野秀雄『良寛 歌と生涯』筑摩書房、1975年、267ページ。
 - (6) 同上、268ページ。
 - (7) 上田三四二『西行・実朝・良寛』角川書店、1973年、144ページ。
 - (8) 中野孝次『良寛の呼ぶ声』春秋社、1995年、82～4ページ。
 - (9) 吉野、前掲書、84～5ページ。
 - (10) 吉野秀雄『良寛和尚の人と歌』弥生書房、1957年、118～9ページ。
 - (11) 吉野、前掲『良寛 歌と生涯』83～4ページ。
 - (12) 久馬慧忠『良寛入門』法蔵館、2000年、68ページ。
 - (13) 吉野、前掲『良寛 歌と生涯』114～5ページ。
 - (14) 同上、50～1ページ。
 - (15) 同上、216ページ。
 - (16) 上田、前掲書、142ページ。
 - (17) 森山隆平『良寛 漂泊の詩』文功社、1976年、244ページ。
 - (18) 中野、前掲書、124～6ページ。
 - (19) 森山、前掲書、241ページ。
 - (20) 上田、前掲書、144ページ。
 - (21) 星野清蔵『良寛の詩境』東晃社、1941年、372～3ページ。
 - (22) 上田、前掲書、145ページ。
 - (23) 東郷豊治『良寛詩集』創元社、1962年、117～9ページ。
 - (24) 石田吉貞『良寛 その全貌と原像』塙書房、1975年、345～6ページ。
 - (25) たとえば、前掲、中野孝次。水上勉『良寛』中央公論社、1984年。
 - (26) 井本農一『良寛』下、講談社、1971年、92～3ページ。
 - (27) 唐木順三『良寛』筑摩書房、1971年、133～4ページ。
 - (28) 同上書、142～3ページ、144～5ページ。
 - (29) 竹村牧男『良寛詩と道元禅』大蔵出版、1978年。同『良寛』広済堂出版、1994年。長

谷川洋三『良寛の思想と精神風土』早大出版部、1974年。同『良寛禅司の眞実相』名著刊行会、1992年。

- 30) 久馬、前掲書、65～74ページ。
- 31) 北川省一『漂泊の人 良寛』朝日新聞社、1983年、42～8ページ。同『良寛と子どもたち 親と教師のために』現代企画室、1988年、17～9ページ。
- 32) 上野和子は言う。「子どもと遊ぶ良寛（まりをつき子供と遊んでいる時が心のやすらぎだったのであろう）」（前掲、『良寛』23、136～7ページ）。なぜ良寛は「やすらぎ」が必要だったのか。上野は上記の文章のあとで、良寛は地位・名誉・財に無関心で、現代人にはまねできない人間だったと書いている。良寛は超越的聖人ではなく、渾沌たる矛盾の中に生きる矛盾の人であったと扱っているのが北川であろう（北川省一「良寛・断章」前掲、『良寛』23、84～7ページ）。
- 33) 北川省一は、かつて朝日新聞の石田記者から、「良寛の核心は何か」と問われ、「公門暫挂錫」で始まる五言詩の終わりの二句、「生涯何所似 從縁且養痴」を示したという（北川、前掲、「良寛・断章」）。良寛の愚・痴・幼は彼の賢・智・老とひとしく彼生得のもの、生々澆測たる渾沌であったと北川は言うのだが、自己の生涯を振り返って「痴」と自認するしかなかった良寛の悲哀を思わずにはいられない。「愚」には、禅者としての肯定があろう。痴にはやはり自嘲・自省を感じる。良寛の詩歌のうち、東郷豊治の分類した「心境・自省を主にした章」に収められている諸篇をとくに愛好する筆者は、良寛の全体（渾沌）から一部のみを取り出す愚者として、北川の戒めに背くのであろう。しかし、「生涯何所能」の自問は詩中にくり返し反復され、自答は「誰道不入数 伊余身即是」であった。そして「已矣復何道 万事皆因縁」の絶望であり、諦念であった。悠々自適の悟境とはとても思えない。良寛を「寂寥の人」と扱った伊丹末雄は、「風は清し月はさやけしいぎ共に踊り明かさむ老の名残りに」について、「顔をほころばせながら悲しみに耐える作者」と評し、また、「案外、大きく深い嘆きを秘めて彼は子どもたちとマリをついていたのではあるまいか」と書いている（伊丹末雄『良寛』恒文社、1994年、123～5ページ）。寂寥とは独りぐらしの孤独の悲哀といった類のものではなく、人間実存の眞実に発するものであり、良寛はこの深い悲哀に貫かれて人懐しく生きたと思うのである。